

序論

社会の生活の中に何度も人は他人に概念や考えや意見などを表現する場合がある。特定の状態を伝えるために、慣用句が使われる。日本語慣用句は、意味の慣用句を形成し、各単語の直接の意味を知っている場合にのみ理解することはできません言葉の集合するですどの呼ばれている。

井上（2001：10）によると、次のように述べている：

「私たちの日常の会話や文書のなかで数多くつかわれています。それらはたいてい短い言葉ですが、時と所に合わせて適切に使うことによって、文章や会話の表現が生き生きと豊かなものになります。」

そして、動物は、外部からの動きに応答して、運動の力を持っている生き物を、特定の大規模な、必要とする食品に成長し、群がるに住んでいる。彼らの存在は人々の日常生活に非常に近いため、多くの動物の名前は、日本語の慣用句で使用されます。彼の本 Garisson (1996:5) は慣用句で使用されている動物の日本社会におけるいくつかの自信があることを明らかにした。一つは、日本の犬の用語の使用は、犬と呼ばれている。

犬は、特に日本社会で、人間の生活に非常に近い一匹です。その存在はまだ人々の生活の近くになるまで、戦争の話として、古代から犬は戦争に連行された。犬は常に彼が死ぬまで帰ってくる主人を待っていたはちこの物語として、いつでも人間の男を伴う忠実な友人として知られており、

この物語は、日本の全地域に広がっている。人々が実際に忠誠を賞賛し、渋谷駅前の記念碑はちこの銅像と、大館駅を構築する。

本論

1. 哺乳類の構成要素を使用している日本語の慣用句の分析

- (49) 伊藤さんと鈴木さんは犬と猿の仲です。(AI, 1996:18)

上の文章にある「犬と猿の仲」という慣用句の意味は「犬と猿のように仲よくできない」である。慣用句の意味は犬猿の仲犬と猿のように一緒に取得していない上記の文の。

2. 爬虫類の構成要素を使用している日本語の慣用句の分析

- (4) そのラーメン屋の前は昼時になると長蛇の列ができる。(AI,1996:75)

上の文章にある「長蛇の列」と言う慣用句の意味は蛇のように長蛇の列はある。そして、慣用句の意味はラーメン店の前で蛇のように並んで人々の行に満ちていた。

3. 鳥類の構成要素を使用している日本語の慣用句の分析

- (41) 私は鳥目です。(AI,1996:99)

上の文章にある「鳥目」と言う慣用句の意味は暗い所で見ることはできません。そして、慣用句の意味は夜が来た時の目がはっきりと見ることはできません。

4. 魚の構成要素を使用している日本語の慣用句の分析

- (34) 彼女は可愛いですけど、鮫肌ですよ。(AI,1996:116)

上の文章にある「鮫肌」という慣用句の意味は彼女はきれいだったけど、鮫のような粗い肌を持っている。

結論

第三章の動物構成要素を使用している日本語の慣用句の分析,二つの結論がある：

1.

No	Idiom	Makna
1	頭の黒い鼠	家族の中で泥棒がある
2	馬車馬	熱心に働く
3	牛耳っている	指導者になる人
4	犬が西向きゃ尾は東	珍しいことではありません
5	犬かき	犬のように泳ぐ
6	借りてきた猫	最初に新しい会った時いいさ
7	猫舌	熱い食べ物や飲み物を我慢できない
8	猫撫で声	猫のように泣き
9	猫背	猫の背中のように曲がった
10	ぬれ鼠	湿重量鼠
11	猿も木から落ちる	誰も完全ではありません
12	狸寝入り	眠っているふりをし
13	うさぎ小屋	狭い兎の巣
14	牛のよだれ	水滴のような牛の唾液
15	犬と猿の仲	犬および猿のように一緒に得ることはありません

16	長蛇の列	このような長い列の蛇
17	蛇の生殺し	仕事半分完成したままに
18	蛙の子は蛙	よく息子のような父のよう
19	おたまじゃくし	そのようなおたまじゃくしとして楽音
20	梟	深夜まで眠ることができない人
21	閑古鳥が鳴いています	ビジネスが成功しなかった実行
22	からすの足跡	からすの足跡のような顔のしわ
23	からすの行水	からすのように急いでお風呂
24	おうむ返し	言葉を繰り返すおうむのように
25	鳥肌が立つ	立っている鶏の羽のような鳥肌
26	鳥目	暗いところで見ることができません
27	金魚の糞	常にどこに続く
28	鮫肌	鮫皮のようにきめの粗い肌
29	白魚のような指	先細りの指
30	うなぎ昇り	同様に急速に素早く立ち上がり と立ち下がりのある状況

2. 動物は人間と一緒に住んでいる生き物であるため、日本語の慣用句は、主に長期の動物を使用している。人間の行動は、しばしば動物と同一視されているので、人々は、特に日常生活の中で重要な役割を担っている動物のどのような種類があると思う日本の人々のために、慣用句に長期動物を使用する傾向があるだけでなく。

DAFTAR ISI

KATA PENGANTAR.....	ii
DAFTAR ISI.....	iv
BAB I PENDAHULUAN	
1.1 Latar Belakang Masalah.....	1
1.2 Rumusan Masalah.....	6
1.3 Tujuan Penelitian.....	7
1.4 Metode dan Teknik Penelitian.....	7
1.5 Organisasi Penulisan.....	8
BAB II KAJIAN TEORI	
2.1 Semantik.....	10
2.2 Idiom.....	12
2.3 Binatang.....	16
1 <i>Inu</i>	10 <i>Hebi</i>
2 <i>Neko</i>	11 <i>Karasu</i>
3 <i>Ushi</i>	12 <i>Fukurou</i>
4 <i>Tanuki</i>	13 <i>Tori</i>
5 <i>Usagi</i>	14 <i>Oumugaeshi</i>
6 <i>Saru</i>	15 <i>Kingyo</i>
7 <i>Nezumi</i>	16 <i>Same</i>
8 <i>Uma</i>	17 <i>Unagi</i>
9 <i>Kaeru</i>	

BAB III ANALISIS

3.1 Analisis <i>Kanyoku</i> yang Menggunakan Unsur Binatang Mamalia.....	23
3.2 Analisis <i>Kanyoku</i> yang Menggunakan Unsur Binatang Reptil dan Amphibi.....	37
3.3 Analisis <i>Kanyoku</i> yang Menggunakan Unsur Binatang Unggas.....	41
3.4 Analisis <i>Kanyoku</i> yang Menggunakan Unsur Binatang Ikan.....	47

BAB IV SIMPULAN

4.1 Makna yang timbul dari idiom bahasa Jepang dengan menggunakan unsur binatang	52
4.2 Makna idiom tersebut berhubungan dengan karakteristik binatang.....	54

DAFTAR PUSTAKA.....	56
---------------------	----

LAMPIRAN 1	vii
------------------	-----

LAMPIRAN 2	xvi
------------------	-----

SINOPSIS	xxv
----------------	-----

RIWAYAT HIDUP.....	xxix
--------------------	------